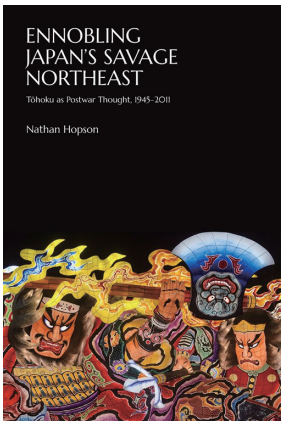
書評

ネイサン・ホプソン『野蛮から高貴へ――日本戦後思想の中の東北地方、一九四五―二〇一一』

Nathan Hopson, *Ennobling Japan's Savage Northeast: Tohoku as Postwar Thought, 1945–2011*

シェーン・ドール



Harvard University Press, 2017

二〇一一年三月十一日の東日本大地震と津波から数時間のうちに東北地方は世界の脚光を浴びることとなった。それから数カ月、福島原発のメルトダウンに対する一般の認識が広まるにつれ、世界の関心は東北に注がれつづけた。ポスト三・一一東北にたいする「緊急民族誌」への呼びかけに多くの声が応じ、新境地が開かれつづけている。[1] だが、おそらくあまりに当たり前すぎるせいだろうが、ある一つの問題がこれまで精査されずにきた。それは「東北」そのものの概念だ。

著者は、戦後期、三・一一以前のこの国の言論における東北概念に分析の照準を定め、東北という他者をつうじて日本を新たにイメージし直そうとする「戦後思想」の系譜を、綿密な裏付けと説得力のある語り口で追う。「文献に残る日本史の多く」が東北を「野蛮で後(おく)れた」場所ととらえてきた（p. 2）。こういう傲慢な描写は、八世紀以来のヤマトの植民地主義に対する東北人の抵抗を反映している（p. 32）。しかし第二次大戦以後、東北という言葉の持つ意味に変化が起き、「戦後的価値創造のための特権的な場」、「国家再発見……という日本の言説の中で浮遊する……記号表現(シニフィアン)となった」（pp. 1–2）。

日本の最初の植民地としての東北は、戦後知識人によって「日本の主流に虐げられ、抑圧され、無視された高潔なる犠牲者、価値と伝統の周縁的保存先」へと役柄を変えた（p. 8）。戦後日本を覆う憂鬱と、帝国秩序への反感が強まる中で、異種の祖先を持つ東北の過去とのつながりに、贖罪の可能性を見出したのである。終戦に至るまで、東北人にたいする曖昧な呼称だった「蝦夷(えみし)」と

は原アイヌのことであり、したがって日本人ではないと考えられてきた（p. 40）。しかし戦後になると蝦夷への見方が変わり、東北人は人種的に日本人とみなされるようになった。東北の歴史遺産は（政治的ではなく）人種的に日本に属するという主張によって、戦後の思想家は、日本が「誤った回り道をする以前の歴史の広がり」に戻るための、時間の扉を開いたのである（p. 6）[2]。

著者の分析のアーチにおいて、東北は戦後日本人にとって祖先の「価値と美徳」が染みこんだ「凪の時代」（p. 10）を思い描くことのできる場の世界になり、それが「近代の諸悪への万能薬」（p. 6）たりえた。こうした戦後思想はポップカルチャーのプリミティヴィズムやノスタルジアに歴然と現れると著者は言う。たとえば宮崎駿の『もののけ姫』の主人公アシタカは、「『日本』の文化や近代の諸相を代表するさまざまな敵対者」に立ち向かう蝦夷の王子だ（pp. 16–17）。一九七〇年大阪万博記念公園の中心に立つ岡本太郎の『太陽の塔』は、一九六〇年代末から七〇年代初めにかけて岡本自身が先頭に立った「縄文ブーム／ジョーモニズム」のランドマークである（p. 203）。そしてあの『おしん』――日本のテレビドラマ史上最大のヒットとなったこの作品は、「国家の神聖なる過去の中心地、特権の場としての東北の先行イメージ」を感傷的に描いてみせた（p. 16）。

本書が語る歴史は、一九五〇年三月二十二日の岩手県平泉、この地方を何代にもわたって統治した藤原氏のミイラ化した数体の遺体から始まる。この「瞬間、戦後特有の東北学が始まった」（p. 21）。藤原一族のミイラの形態学的分析によって、蝦夷が原アイヌではないことが分かると、独立しているが民族的には日本人で、京都に比肩する政体としての平泉という概念にたちまち弾みがついた。アイヌ祖先説という言葉の軛（くびき）が蝦夷からとれて、東北は民衆の頭の中にあった「不名誉な」地位から解放され、戦後の自己アイデンティティ構築が可能になった。

ここに一つ残された問題は、国家再発見におけるアイヌの役割である。アイヌは蝦夷と違い、戦後の言説空間において「高貴な蛮人」とはみなされなかった。民族的「日本人」ではないからだ。東北学者、高橋富雄（一九二一―二〇一三）の「もし東北の歴史と文化が異人（アイヌ）の民族的・人種的遺産から生れたのなら、［蝦夷は］無視されていたはずだ」という説を、著者は民族的アイデンティティの新たな典拠ととらえた（p. 139）。ただし戦後の言論の中でアイヌが卑賤の存在でありつづけたのか、あるいは単に無視されたのかは明確にされていない。東北を考えるとき、少なくともアイヌの不在やその痕跡という点で、このアイヌ問題はきわめて重要だと評者は考える。

著者の分析は綿密で詳細だが、対象が平泉や東北の太平洋側の諸県に偏り、秋田や山形はあまり触れられていない。青森につ

いては後段で（はあるが、重要な）三内丸山遺跡のことが述べられている（p. 206）。著者の分析視座に限界があるのは理解できる。彼も言うように平泉の藤原ミイラが蝦夷についての人種的想定を掘り崩すのに重要な役割を果たしたからだ。平泉の中心寺院、中尊寺は三・一一後数カ月してユネスコの世界遺産に指定され、平泉の妥当性をさらに押し上げた（pp. 152–55）。しかし、一般の人びとの頭の中にある東北イメージは、著者の説が暗示するように構成地域の集合体であり、政治エリートだけのものではない。

秋田県の男鹿半島や山形県庄内地方など日本海沿いの地域も、東北についての一般認識や「戦後思想」に決定的に影響した。たとえば男鹿半島の奇怪な「なまはげ」は長年首都圏で学術的想像力を炎上させてきた[3]。平泉のミイラに匹敵するのは、庄内地方の即身仏である[4]。むろん平泉は著者がたどる学術論争の軸ではあるが、東北の他の場所も戦後の東北を新たに想像し直す作業に貢献してきた。東北という概念には、一冊のテキストでは語りつくせぬ素材が詰まっている。

やむを得ぬ限界はあるものの、本書は画期的な仕事だ。東北学の批判的検証であると同時に、その内部に歴史的に重要な変化をもたらすものでもあり、そこから戦後アイデンティティとその持続効果について、さらなる議論が期待できる。

注

（1）Slater 2015 and Dahl 2017

（2）この引用は Schivbusch, *The Culture of Defeat* (2003, pp. 29–31) の叙述を著者がまとめた。

（3）Yamamoto 1978 and Foster 2013

（4）Hori 1962 and Castiglioni 2015

参照文献

Castiglioni 2015
Andrea Castiglioni. *Ascesis and Devotion: The Mount Yudono Cult in Early Modern Japan*. PhD Dissertation, Columbia University, 2015.

Dahl 2017
Shayne A. P. Dahl. “Summits Where Souls Gather: Mountain Pilgrimage in Postdisaster Japan.” *Journal of Religion in Japan* 6:1 (2017), pp. 27–53.

Foster 2013
Michael Dylan Foster. “Inviting the Uninvited Guest: Ritual, Festival, Tourism, and the Namahage of Japan.” *Journal of American Folklore* 126:501 (2013), pp. 302–34.

Hori 1962
Ichiro Hori. “Self-Mummified Buddhas in Japan: An Aspect of the Shugendo (“Mountain Asceticism”) Sect.” *History of Religions* 1:2 (1962), pp. 222–42.

Schivbusch 2003
Wolfgang Schivbusch. *The Culture of Defeat: On National Mourning, Trauma, and Recovery*. Metropolitan Books, 2003.

Slater 2015
David H Slater. “Urgent Ethnography.” In *Japan Copes with Calamity*, revised

edition, eds. Tom Gill, Brigitte Steger, and David H. Slater. Peter Lang, 2015, pp. 25–49.

Yamamoto 1978

Yoshiki Yamamoto. *The Namahage: A Festival in the Northeast of Japan*. Institute for the Study of Human Issues, 1978.

（翻訳：朝倉和子（ＳＷＥＴ所属））

＊本稿は *Japan Review* 32 (2019) に掲載された英文テキストの日本語訳である。